

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子越中島保育園
施設所在地	江東区越中島2-1-30 越中島STビル4階
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

世界・音楽表現

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

音楽は世界の共通言語として、子どもたちが世界とのつながりを感じるきっかけ体験。身近な音を題材に「この音は何だろう」「音ってなんだろう」「世界のリズムって違うのかな?」という問いを探究。

## 2. 活動スケジュール

4月～7月

【音・楽器との出会い】

- ・ボランティアによるウクレレ演奏や保育士の合奏を通し、日常とは違う音色に触れる。
- ・5歳児は「ひげじいさん」の音階歌唱からピアノの基礎探究を開始。
- ・7月の誕生日会に向け、年長（ピアノ）と年中（鈴）による「きらきら星」の合奏練習を通じ、他者と合わせる意識を持つ。

7月～10月

【世界のリズムとの出会い】

- ・夏祭りのテーマを「大阪万博」とし、オリジナルの盆踊りを通して地域や異年齢との交流を楽しむ。
- ・保育士が研修で学んだダンスを子どもたちに伝授（「すずめのサンバ」等）。
- ・講師から楽器（鈴、マラカス、カスタネット等）の扱い方を学び、自分で楽器を選んで演奏する主体性を育む。

11月～12月

【音の重なりを楽しむ】

- ・乳児もギロやウッドブロックなど新しい音に挑戦し、音が出る仕組みを探索。
- ・「こども会議」を行い、自分たちで演奏曲（「ミッキーマウスマーチ」「トトロ」等）を決定。
- ・大型楽器（小太鼓、シンバル、グロッケン等）を導入し、多重奏による音の響き合いを探究する。

1月～現在

【リズムの深化と伝承】

- ・わらべうた（「あんたがたどこさ」等）からサンバ、フラメンコまで、世界の多様なリズムを体験。
- ・年長児が年下のクラスへ楽器を教える「伝承」の姿が見られ、活動が園全体の文化として根付く。

### 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

#### 【1歳児・2歳児】

落ち着いて活動できる静かな空間を確保し、音の揺れを視覚化する「ゴース（スカーフ）」や、お気に入りの色を選べる「ミュージックベル」を導入。

#### 【3歳児】

「音の正体」を探れるよう、ギロやカスタネット等の打楽器を配置。あえて音階を「ド・ミ・ソ」に絞ったベルを準備し、不協和音にならず心地よく響き合う体験ができるようにした。

#### 【4歳児・5歳児】

音楽を通しての表現を十分に楽しめる広々とした環境

電子ピアノ / ピアノ、タンバリン、鈴、マラカス、カスタネット、ギロ、ゴース（スカーフ）など多様な楽器から「世界のリズム」に合う音を子どもたちが自ら選べるよう配置。

又、鍵盤ハーモニカ（ピアノ）や、本格的な打楽器であるスネアドラム、グロッケン、シンバル、マレットを加え、合奏を十分に体感できる環境を設定。合奏の練習や音の仕組みを学ぶ座学に適した机・いすを設置。静かな空間で、自分たちの出す音を客観的に聴き取れる環境を設定。

### 4. 探究活動の実践

<活動の内容>

① 発表会に向け幼児クラスでは「こども会議」を実施。「ミッキーマウスマーチ」や「となりのトトロ」など自分たちが演奏したい曲を決定。ふぁんばりんの題材でもある「世界の国」への興味から「世界のリズム」について考え、多様な楽器の中から、リズムに合う音を子どもたちが自ら選べるよう配置し、自由に触れながら楽器への好奇心を満たす時間を設ける。

② 「世界」をテーマにした想像力の向上

夏祭りのテーマを「大阪万博」に設定し、「世界のリズム」への探究としてサンバ、フラメンコ、エイトビートといった異国のリズムに触れ、その背景にある文化を音を通じて体感する。

ピアノの音の変化を「象の歩み」や「雷」に見立てて身体を動かすリトミックを通じ、聴覚情報をイメージ（想像力）を養う体験をする。

③ 外部講師の活用と専門性の向上

図書館ボランティアによるウクレレ演奏や、保育士によるトランペット・クラリネットの本格的な演奏に触れる機会を設け、子どもの「もっと聴きたい」「やってみたい」という意欲を促す。専門講師による指導: リトミック講師から楽器の扱い方や奏法を学び、保育士が研修で学んだダンスを子どもたちへ伝授する。

④ 発達段階に応じて環境の再設定

外部講師からの助言を受け、乳児は物理的な「音」への興味ををより引き出す内容、幼児は言葉を介したリズムの言語化ついてをより深めていけるようにしていく。

・乳児（1・2歳児）

1歳児はミュージックベルを「振る」だけでなく「置いて叩く」方が音が響くという物理的な発見を自ら行い、耳を近づけて音色を確認してみようとする。2歳児は楽器の内部に触れて構造を確かめるなど、音が出る仕組みそのものへの知的好奇心を広げる。

・幼児（3～5歳児）

3・4歳児は、「ドーナツ」「ふりふり ぽてと」といった馴染みのある言葉をリズムに置き換える「言語化」を通して、複雑な拍や休符を論理的に理解。

5歳児は、楽曲の構造を理解し、音階や指番号という論理的な枠組みの中で一曲を完成させる達成感を味わうとともに、周囲の音を聴きながら自分の役割を果たす「合奏」へと繋げる。

⑤ 保護者への発信と共有

子どもたちが自ら楽器を選び、試行錯誤しながら自信を持って表現するようになった過程を、写真やスライドを用いたドキュメンテーションで保護者と共有。お誕生会やお楽しみ会などの行事を通じ、地域の方や保護者に向けて演奏を披露したりすることで、音楽を通じた一体感を体感。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・音の物理的特性と仕組みへの探究

乳児の子どもたちは、楽器そのものへの知的好奇心を強く示しており、1歳児はミュージックベルに対し、耳を近づけて音色を確認する深い集中を見せ、「振るよりも、床に置いて叩く方がいい音がする!」という物理的な発見を自ら楽しんでいました。2歳児もまた、ハンドベルの内部に触れて「どうして音が鳴るのかな?」\*\*と仕組みを確かめるなど、観察に徹する姿から主体的な演奏へと繋げていきました。

・自己主張から「共鳴」への社会性の芽生え

楽器の選択において、2歳児が「赤がいい!」と色の好みを強く主張する場面では、保育者の仲介により葛藤を乗り越え、共に音を奏でる心地よさを味わいました。3歳児では、楽器の交換を言葉で伝え合うなど、幼児期らしい円滑な貸し借りの姿が見られ、「どうぞ」と楽器を譲り合うことで一つの音楽を作り上げる一体感を分かち合っていました。

・リズムの言語化と達成感の共有

4歳児は、難しいリズムを「ふりふり ぼとと」などの言葉に置き換えて表現し、成功した際には保育士に「できたよ!」と知らせて喜びを共有していました。5歳児になると、楽曲の構造を理解し、「面白い!」「楽しい!」といった肯定的な言葉を交わしていた。

・憧れの連鎖と保育者の応答的関わり

乳児が幼児の楽器演奏練習を真剣な眼差しで見学する姿は、次なる探究への「憧れ」を象徴していました。保育者は、演奏したい衝動から音が鳴ってしまう3歳児に対し「楽器を抱えて待とうね」といった具体的な指示で自制を支えたり、5歳児の成果を認め自信を深めさせたりと、子どもの主体性を守りながら伴走する姿が見られました。



### <振り返りによって得た先生の気づき>

活動の初期段階では、1歳児が初めて目にする楽器や講師を前に緊張し、保育者にしがみついた場面もあったが、馴染みのあるメロディが流れると、その安心感から自発的な手拍子やリズム運動へと音楽表現を楽しむ第一歩となった。特にミュージックベルを用いた活動では、1歳児が「振る」という一般的な奏法ではなく、「床に置いて叩く方が音がよく響く」という発見をし、耳を近づけてその音色に興味深そうに確認する姿に、深く観察しようとする探究心が表れているように感じた。

この「音が出る仕組み」への関心は2歳児へと引き継がれ、慎重に周囲を観察していた子どもたちが次第に楽器の内部に触れ、その構造を確かめようとする知的好奇心の高まりを見せるようになったと感じる。ハンドベルの色選びにおいて「赤がいい!」と強い自己主張を見せる姿も、単なる好みではなく、「赤いこの楽器を自分でやってみたい」という楽器への興味からくる自己表現であり、保育者の仲介を経て「友だちと楽器に触れる楽しさや心地よさ」を知ることで、友だちと視線を合わせ、喜びを共鳴させる社会的な探究にもなっているように見られた。

3歳児になると、音を鳴らしたいという本能的な衝動を「楽器を抱えて待つ」という具体的な身体操作も加わり、音楽のルール（静寂と音の対比）を探知し、さらに4歳児では複雑なリズムを「ふりふりぼてと」といった独自の言葉に置き換えて理解する「言語化」にも挑戦し、目に見えない音の連なりを自分なりに把握しようとする認知的な探究の深まりも感じられた。自ら導き出したリズムで演奏に成功した際に「できた!」と大人へ知らせる姿は、探究の過程が自己肯定感の向上にもつながっているよう見受けられた。

5歳児においては、合奏を通して「ミッキーマウスマーチ」などの旋律を音階や指番号を理解するという教育的な部分を含めて、真剣に鍵盤をみつめ、没頭している様子が見られた。合奏の中で、タンバリンや鈴の音に耳を澄ませ、「周囲と息を合わせよう」と模索する姿は、個の探究が「集団による表現の創造」へと発展した瞬間であるようにも感じ、活動中に飛び交う「面白い!」「楽しい!」という言葉は、音の仕組みや他者との共感から生まれる喜びとして表現しているように感じた。